

地形学の教え方を工夫して地理の授業に興味を持たせる試み

The trial which devises how to teach geomorphology and gives interest to a geographical lesson

青木 邦勲^{1*}

Kunihiro Aoki^{1*}

¹ 日本大学豊山中学校・高等学校

¹Nihon Univ.Buzan junior high school & high school

本校では高校2年生の地理Bは4単位となっている。そのため、1年間授業を行うと系統地理学で授業が終わってしまう。生徒によると、系統地理学の学習は「理論ばかりの授業で地域的な特色や広がりを見ることが少ないから興味を持っていない」と話す。また、「1学期に自然地理の内容が続くことが辛い」と話す生徒も少なくない。

このことを踏まえて検討を行った結果、学習指導要領や教科書の項目通りに授業計画を立てるのではなく、「系統地理学と地誌学が混ざる形での授業計画が望ましい」ということになった。そこで、昨年度から学習する順番を変えて、2年生の1学期は地形の学習の後に「世界の鉱工業」という項目を設定した。この進め方は系統地誌学の資源・産業と地誌を混ぜた形である。また、これに関連する形で農牧業や都市の内容について軽く内容を扱い、全ての内容は相互に関連し合っているという目標を掲げる形で授業を行った。

この結果、地形の学習において生徒の思考に変化が見られた。今まで「地形用語の暗記」ばかり行っていた生徒が、「なぜその地形が形成されるのか?」「この地形が見られる所ではどのような人間活動が見られるのか?」など、教科書の枠を越えて地理的な思考が少しずつできるようになった。また、地学的な現象について興味を持つようになり、地学1(地学基礎)の内容を取り扱った。さらに、これによって地形の分布がある程度理解できているので、鉱産資源の分布や各地域の工業分布の話をする地域的な特色を考えることができる。日本との違いや新しい発見をすることができるので興味を持ったようである。

事例の1つを紹介する。世界の大地形を教える場合、教科書は安定陸塊・古期造山帯・新期造山帯の三つの区分と分布のみを扱っている。私の授業では、三つの地体構造の成因や産出される資源の名前と資源が産出できる理由まで学習させる。その後、学習した知識がどう活きるのかを知らせるために、アメリカ合衆国の北東部の鉄鋼業の様子や、中東地域の産油地域の様子について概略を述べる。この時点では概略のみ述べて、実際は地形学の学習の後に世界の工業地域と題した項目の中で詳細を扱う。こうすると学習したことを忘れる可能性が低くなり、獲得した知識を使ってすぐに新しい内容の学習ができるので負担が軽くなる様子である。

つまり、地理Bにおいては地形学の取り扱いと、その後何を扱うかで生徒の学習に良い影響が出ることを述べたい。もっと大げさに言えば、地理の履修者の増加も期待できることを述べ、意見を頂戴したい。

キーワード: 教科書, 地形学, 地誌学

Keywords: textbook, geomorphology, regional geography